

特別報告

専門職大学制度が提起する課題

—芸術文化観光専門職大学の設置を通じて—

川目俊哉

Issues raised by the professional university system:

Through the establishment of Professional College of Arts and Tourism

KAWAME Toshiya

2021年に兵庫県豊岡市に開学した芸術文化観光専門職大学は、その名の通り、2019年に施行された専門職大学制度に則って新設された四年制大学である。本活動報告は、開学までの設置認可申請業務の記録を残すとともに、本学設置の経験から、あらためてこれからの社会で必要とされる専門職大学をいかに具現化していくかについて、二つの視点から問題提起するものである。一つに、未来志向の大学設置認可を、二つに新たな時代の専門職について考え、認可側と申請側の共創による新たな大学づくりの必要性を提起する。

1 二つの問題提起

先に本学設置を通じて認識した二つの問題点に触れたい。一つに、短期大学の制度化以来約50年ぶりの新たな学校種をつくり出す専門職大学制度は、何を目標しているのかといういささか根本的な問いである。これまで設置されてきた専門職大学の分野はさまざまである。すでに社会で所謂専門職として認知されている分野もありながら、本学もその一つだが、未だ社会にその専門職としての認識は況や、職業としての理解すら未確立なものも含まれている。専門職大学がこれからの社会を活性化する専門職の育成を目指すものと捉えたときに、設置のための議論のスタートラインが、この両者で大き

く異なることは必然である。前者は当該専門職の進化であり、後者は当該専門職自体の社会的提起である。

本学は、兵庫県北部但馬の地域での取り組みと呼応しながら、本学が育成を目指す人材が、全国の、そして世界の各地域でますます必要になるはずだという思いのもとに設置に着手された大学である。設置の経過と軌を一にして、主に文化財を想定した芸術文化の世界での保存、継承から活用への視点の転換、観光分野での旅行の出発地である「発地」から行先である「着地」する地域への視点の転換、かつ文化観光推進法制定への流れ等、文化観光への注目が加速したことは、我々の気持ちを大きく鼓舞することとなり、思いは確信に変わったと言ってもよい。これまでに例のない学問分野の組み合わせは、まさにイノベーションのための「新結合」である。しかし、これは先行事例のない、まだ見ぬニッチな市場を狙うものであり、設置認可申請業務においては困難を抱えることとなった。特に、学生募集や就職に関するニーズ調査等ではハードルを抱えることになった。このようなことは、右肩上がりの時代の社会のニーズに対応する大学の新設であれば、起こらなかったことだろう。しかし、今や社会的な大きな物語が存在しない上に、大学教育に限らず、ニーズに対する問題解決はすでに飽和状態にあるのであって、それが新たな成長を生まな

いことは、来し方数十年を振り返れば明白である。この平成から令和への転換期に新たに作られた専門職大学制度が、新たな社会創造のエンジンになることを強く意識するならば、大学づくりもこれまでその基礎となった学の体系の重力に抗することができるよう、そして、新たな職業の在り方を創造できるよう設置認可自体も変化を迫られていると見ることができる。

二点目の問題提起は、現在よく使われる「リスキリング」という言葉が提起している社会の現在地と教育の関係性の問題である。ここ数十年、教育の世界は「コンピテンシーの時代」だと表現できる。OECDがキー・コンピテンシーの概念を提起したDeSeCo (Definition and selection of competencies) プロジェクトを行ったのは1999～2002年にかけてである。キー・コンピテンシーは3つのカテゴリーと9つの能力で表現された。その後、わが国でも社会人基礎力、学士力、21世紀能力等育成すべき能力についてさまざまな名称がつけられた。リスキリングは、この流れの中ではいささか違和感の拭えない言葉である。

もちろん、第4次産業革命という時代の変り目にあって、あらためて標準化されたスキルに光を当てることは、例えばDX推進を担う職種への転換等を想定した場合に有効であることは言うまでもない。しかし、既存の社会のパラダイム自体が問われる今、そして失われた数十年にあらためて立ち向かうとすれば、そのツールがスキルのみではないことは明白である。本学に引きつけられ、専門職である以上、必要な知識と技術の体系が明確化されていなければならないものの、そのことをもって、新たなまちづくりのための芸術文化観光という方法

論が社会の中で起動し、実装するかは別であり、ここに専門職大学の育成する専門職なるものへの問いかけが発生する。

実装対象となる社会の様相は、地域であれ、組織であれ、集団であれ、それぞれに固有性を有している。この固有性への高い認識力とゴールを見据えたアプローチの見極めが、問題解決の成否を決するのである。この実装のためのキーとなる術を「プロフェッショナルアーツ」と呼んでみたい。スキルを起動させる文脈を読み込み、見極める術のことである。「リスキリング」という言葉は、未だ社会に存在しない専門職を考える場合の知識と技術のセットの確立を要請するとともに、実はそれ以上に重要な、その手前に存在する専門職としての問題への切り込み方である「プロフェッショナルアーツ」に視点を向けさせることになる。

これら二つの問題については、最後にあらためて触れたい。

2 新大学設置の経過確認

さて、ここからは本学設置の経過を確認する。新大学の設置認可申請に関する時期は、大きく4つの時期に分けられる。第1期は、2017年12月から翌2018年3月までの兵庫県庁に設置準備に関する組織ができる前までの期間である。第2期は設置のための準備室ができてから基本構想を策定するまでの2018年4月から11月までである。第3期は基本構想の策定後、翌年の設置認可申請を行う2019年10月までである。第4期は設置認可申請後、補正、再補正申請を行い、認可を受けた2020年10月までの間である。もちろん、この第4期の後、新大学に

とって極めて重要な学生募集が始まり、翌2021年の4月に開学に至るが、この第4期以降については、紙幅上、今回の報告から外すこととする。

さて、新大学設置の幕開けとなる第1期である。私がこの新大学設置の検討の場に参加したのは、2017年12月に行われた兵庫県企画県民部が主催する会議体「第2回専門職大学構想検討会」だった。因みに第1回の検討会は、遡ること4カ月前の8月であった。検討会参加者は、現在、大学の学長である平田氏が座長を務め、現副学長兼学部長である藤野氏、並びに有識者、地域産業界、県庁職員から構成される11名である。議事は「観光・文化分野における専門職大学構想の具体化」であった。設置認可申請の支援の任にあたるものとして出席した私にとって最大の関心は、大学の内容以上に、プロジェクトの成否にとって最も重大な要素となる開学スケジュールのことであった。2020年春の開学と2021年開学の二つの選択肢があったが、この12月時点の進捗度合いが、それを決めることになるからだ。第2回目を刻んだこの会議で、2020年開学はないと自らの内で判断したことを記憶している。

年が明け2018年、私は豊岡市役所にて、新たな大学づくりに関わる豊岡市職員として記者会見に臨み、兵庫県庁に派遣された。兵庫県庁企画県民部にて、私と豊岡市から派遣された長谷川氏の2名が、専門組織のない状態で大学づくりのスタートを切ることとなった。

1月の会議で、2020開学を併記しつつも、2021年開学スケジュールを提示した。また、その根拠となる大学設置のタスクリストを提示した。大学設置・学校法人審議会という大学設置のフレームワークから、法人審議会に関わるタスクは対象となら

ないものの、2021年開学でもきわめて異例のスケジュールであることは間違いなかった。2021年開学のためには、この翌年の2019年の10月には設置認可申請書を提出しなければならず、かつ言うまでもなく、その申請書提出段階ですべての計画が具体化されていなければならない。そこまで1年半強しか時間はない。この時期に、大学改革の専門家として活躍していた仲間からももらったコメントが、いずれもプロジェクトに関わること自体に対して否定的なものであったことは今だから書けることである。

学部・学科の基本的な性格については、大学の入口と出口を見据えて4つの異なる方向性を示した。即ち①地域創生分野 ②経済・経営分野 ③グローバル分野 ④デザイン分野である。また、この段階で「観光文化」ではなく「文化観光」という議論もなされ、この点はその後の学部の在り方にとって重要なガイドラインとなった。本学の最大の特徴である1学部1学科構成は、この構想検討会の2回目から3回目の間に議論がされ、当初案の1学部2学科から舵を切ることとなった。二つの分野を学科としてそれぞれに分解することは、各々既存の厳しい学生募集市場に自らを投じることになり、競争市場におけるポジション確立により大きな負荷を抱えることになると同時に、育成人材の観点からも、大学が溢れるこの時代に公金による莫大な投資をするには説得力が足りないかと捉えられた。

法人までを含んだ全体組織としては、専門職大学ではない従来の大学としての展開も想定をし、学部と大学と法人という3つの組織レイヤーの在り方について、6通りの展開オプションを描いた。

年度が変わり第2期に入る。2018年4月設置認可

申請業務を担う専門職大学準備室が兵庫県庁に設置された。設置に関する準備室は、法人系業務と大学系業務という大括りの2部門が設置され、総勢13人体制となった。

専門職大学準備室の第1ハードルは、但馬地域専門職大学設立準備委員会の設置と基本構想の確定である。但馬地域専門職大学設立準備委員会は有識者、産業界、教育・文化、行政の4グループ計13名で構成された。基本構想は、その確定後にカリキュラム作成や教員の募集、既存施設のないゼロベースのハード設計も行い、設置認可申請書を作成することを考えれば、設置準備室発足から間もない夏8月にはこれを策定するという極めて厳しいスケジュールを立てざるを得なかった。

大学とは異なるもう一つ大きな課題が設置主体の件である。当初は県と但馬域内の市町による一部事務組合や広域行政事務組合での計画等も検討された上で、最終的には既存の兵庫県立大学法人(現・兵庫県公立大学法人)の傘下に入ることとなった。この1法人2大学のアンブレラ方式は、この設置検討期間中に他の国立大学でも計画が進み、分野の重なりがない双方の大学にあって、かつ設置者である県から見ても理に合った形だった。設置者変更、定款変更に関わる認可申請は2021年開学前に行われ、開学と同時に設置者変更が行われた。

設立準備委員会は2018年5月を皮切りに、8月の会では基本構想案を策定し、9月にパブリックコメントを受けるといいたいへん精力的な取り組みを進め、11月に構想を確定させた。設置認可申請の背骨になる教育課程については、5月の第1回の設立準備委員会を受けて、同月、現副学長である藤野氏を部会長とする教育課程専門部会で検討がスター

トした。基本構想案では、基本目標を「舞台芸術の学修で得た能力を基礎として、地域と協働し、多彩な地域資源を活かし、芸術文化を通じた新たな価値を創造できる専門職業人材を育成する」とともに、「地域課題を解決するプラットフォーム機能を発揮」するとした。この時点で、演劇の手法を取り入れたコミュニケーション教育、観光地経営、文化創造、地域課題解決のプラットフォームとしての地域リサーチ&イノベーションセンターといった新大学の重要なキーワードが提示された。また、教育面の特徴として、60分×2コマの連続授業や講義・演習を第1と3に、実習、集中講義を第2、4に配するクォーター制も提示された。

しかし、この第2期終盤で、設置認可申請にとって大きな衝撃もたらされた。専門職大学制度スタート初年度である2019年度開設の申請に対して、大学設置・学校法人審議会会長から認可のタイミングで異例のコメントが出たのだ。背景は初年度申請された17件の計画の内、いったん判断を保留された後の認可を除けば、認可が下りたのは1件に限られことにある。コメントには「専門職大学制度の特色を活用して、その社会的使命を十分に果たす適切な設置計画としては認められないものが多く見られた」とあった。コメントの最後には「専門職大学等として相応しい教育課程、教員組織、教育研究環境を備え、既存の専門学校や大学とは異なる優れた専門職業人材を養成する特色ある大学としての設置計画を練り上げていただき、十分な準備を経た上で申請するよう強くお願いしたい」とある。つまり、これまでとは異なる専門職大学を設置することに対する基本的な理解が足りていないとの異例の強いコメントだ。従来の大学にない二つ

の分野を架橋するカリキュラムを模索していたわれわれにとって、ますます認可のハードルの高さが突き付けられた形となった。

基本構想が確定すると、第3期に入る。大学づくりの背骨ともなる教員の募集に関する教員専門部会が立ち上がり、この年の12月下旬を応募期限とする教員公募も始まり、教員の体制づくりが佳境を迎えた。同時に施設整備に関わる基本設計は年内急ピッチで進み、年明けの実施設設計へと進んだ。整備の基本的な考え方として演劇を学ぶカリキュラムに対応する劇場、スタジオ、実習室等を整備すること、アクティブラーニングに対応すること、地域と連携する拠点の整備等が盛り込まれ、防音、防振の関係から本館棟と劇場を備える実習棟を別々に整備し、渡り廊下でつなぐとされた。入試の在り方、学生募集についてもそれぞれ専門部会のもとで検討を進めた。入試の在り方は、当初から学力だけではなく、グループワーク、面接、そして小論文を課すことが検討され、本学の大きな特徴の一つとして位置づけられることとなった。

年度末の3月には第5回の設立準備委員会が開催された。教育課程の編成、教員募集の状況、入試方法の検討状況、施設整備内容、学生募集の広報計画が報告、議論された。

2019年度に入ると、第6回の設立準備委員会、認可申請案の概要の検討、並びに高校生に対する学生募集に関する調査と企業等に対する採用意向に関する調査の報告が行われた。このころから各種の広報も文科省のガイドラインに則った上で本格化させた。認可申請前最後の委員会は9月下旬に第7回が開催され、設置認可申請書の各種書類作りも佳境を迎え、10月の申請を迎えた。

申請後の11月から12月にかけて、高校と大学、そして教育界全体に歴史的出来事が起こった。本学開学年と同じ2021年の1月の共通テストから導入予定だった大学入試改革が本番寸前の約1年前のこの時期に頓挫したのだ。この件については、開学初年度は共通テストに参加できない本学としては、事の成り行きをある意味で冷静に見ていた。目的が見失われた手段先行の議論には疑問が多く、それを惹起した根の深い問題があると考えざるを得なかった。この大きな出来事は本報告の趣旨とは重ならないが、本学の設置認可申請の過程で起こった高大接続改革の歴史に残るもの故、触れておかざるを得ない。

さて、設置認可申請の最終第4期は、申請翌年2020年1月早々に文部科学省設置室から厳しい審査意見が戻されて始まったと言ってもよい。最も大きな指摘は、芸術と観光が併設されているのみでなく、両者を繋ぐ学修が行われる教育課程になっているかという点だ。これについては、観光と芸術文化の両翼を繋ぐ胴体部分に両分野から相互にアプローチする芸術文化観光概論（後の芸術文化と観光）、地域創生論、芸術文化・観光プロジェクト実習、専門演習、総合演習を置き、マネジメント入門等経営系の科目とともにコア科目として位置づけることをより明確化した。この点をはじめ審査で指摘された点について、3月下旬までに補正申請書類の提出を行った。かつ、この補正申請に対して、7月に再度意見伝達があり、8月の実地審査を経て再補正申請を行った。当初の認可スケジュールでは、5～6月に意見伝達があり、対応がうまく進めば8月には認可が出るというスケジュールだったが、コロナ禍により審査自体が遅れることとなった。この遅れは、

そのまま学生募集期間の短縮化に繋がるもので、本学のような全く新規の設置の場合、高等学校や高校生、保護者への認知獲得に大きな影響があるだろうことを覚悟せざるを得なくなった。第4期のゴールである認可は、10月下旬にその報を無事受けることとなった。この報はある私事と重なったこともあり、大学設置のミッションを負っていた私には忘れ得ぬ連絡となった。

そこから学校推薦型、総合型入試の実施までわずか1ヶ月半ほどの時間しかなかったが、開学初年度の各種入試は学校推薦型が4.9倍、総合型が11.1倍、年が明けて行われた一般選抜Aが4.7倍、一般選抜Bが27.8倍、トータルで7.8倍の志願倍率となった。併願構造によってつくられる受験市場において、懸念された独自分野による孤立状態とは異なる結果を得られたことは大きな成果となった。かつ、入学した学生への調査では、第1志望率が85%という本学への大きな期待をあらためて確認するに至った。

入試を行いながら、開学新年度へ向けてのさまざまな準備を進めたが、ここでは割愛させていただく。2021年4月1日に開学式、4月5日に第1回の入学式が行われ、但馬地域初の四年制大学がその歴史の時を刻み始めることとなった。

3 新たな大学づくりのための共創

新たな大学づくりを経験して、かつ時を同じくして、海外での新たな大学教育の情報に接して考えさせられるのは設置認可の在り方である。これからの新たな大学づくりは、申請側と認可側の両者が、従来の関係性を超えて、次代を創るために知恵を

交換、結集して行わなければ、グローバル社会では周回遅れになると危機感を持つ。本報告冒頭の二つの問題提起を、そこに重ねながらまとめを行う。

本学のコンセプトは、芸術文化と観光の両分野を架橋して、地域の活性化につなげるというものである。本学の設置は、兵庫県北部の但馬地域の3市2町が兵庫県に対して高等教育機関の設置要望を出したことに始まる。文人墨客を迎えた歴史的な温泉地を持ち、現代にあって、演劇を中心とした街づくりが本学の独自性の土台となった。この点は大学づくりにおいて、1学部1学科という形をとって実現した。先に書いたように、芸術文化と観光を一つの学部の中の2学科として構成したならば、それはこの少子化の時代にあらためて大きな投資をしてまで作るべき大学になったかといえば疑問だと言わざるを得ない。

われわれはこの一見、理解し難い組み合わせにこそ、これからの地域の元気を創り出すことのできる専門的な仕事があるはずだと考えた。本学の基本戦略はまだ見ぬ市場を見える化し、そこでポジションを取るブルーオーシャン戦略¹⁾である。ここでぶつかる問題は、将来の仕事のイメージである。専門職として、この両分野を架橋する専門職はまだ残念ながら確立していない。観光分野で確立している資格を背景とした専門職も、芸術分野でのそれも芸術文化観光を芸術文化と観光に分解しただけであり、独自の専門職としての確立には距離がある。われわれは設置認可申請の過程において多くの言葉を費やした。観光地域づくり法人のDMOと芸術文化振興を図るアーツカウンシルを架橋すると表現しても、それぞれが分解したものであることは免れないし、そもそもその両者自体が、まだまだ組

織として脆弱であることは事実である。しかし、できない理由を挙げていても状況は改善しない。脆弱だからこそ、それをバージョンアップする切り口を提供することこそが重要なのである。このような考え方こそが、現在の設置認可の在り方に問いを投げかける。新たな専門職大学制度は、設置審査の委員に実務家が入ったことで、従来の大学設置認可とは異なるものになりながらも、それはある意味、テクニカルな話であると言わざるを得ない。これまでの設置認可のプロセスは、ある意味でレッドオーシャンと呼ばれる競争が激しい、既存のロジックで組み立てられた枠の中にあるものとして捉えることができる。ブルーオーシャンの切り出しを促進できる設置認可とはどんなものかを検討しないと、専門職大学は過去の先例という大きな重力から離陸できないかもしれない。専門職大学制度は、社会を先導する専門職を育成するエンジンになるべく、新たな設置認可プロセスを編み出すことが必要だ。

もう一点の問題提起は専門職の内実に関わるものであった。戦後日本の大学は、この専門職大学制度ができるまで一つの設置基準で大学をコントロールしてきた。戦後新制大学がスタートしてから、我が国の歴史はさまざまな転換点を通ってきたことは言うまでもない。もちろん、この時代の変化に合わせて、高等教育政策が計画志向と市場志向の時代を行き来していたことは大学界では周知のことである。しかし、大学の基本的な役割について、ギアチェンジが行われないままに経過していたことは、「入口」の入試と「出口」の日本的な新規学卒一括採用がそれを可能にしていたと言えるが、きわめて大きな問題である。戦後の単線型高等教育に対して、その多様化への要請は新制大学がスター

トして間もない1950年代からすでに言われていた。マーチン・トロウの論²⁾を引き合いに出すまでもなく、進学率の変化によって高等教育の性格が変わってきていたことも言うまでもない。国の政策に応じて、それを論拠としたさまざまな新增設改組が行われるという動きもあった。しかし、それは個々の大学の組織のケイパビリティによっていくらかの違いはあれども、同じ政策を参照し、その流れに乗るといったものだったと言える。

ポイントは、構想のもととなる社会に対する認識は、大学組織の「外側」で組み立てられたに等しいということだ。しかし、本来あるべきは、高等教育の設置機関が、自らの問題意識の下で社会の変化の兆しを捉え計画を作るという姿である。社会の要請に対応するのではなく、社会の変革を先導する大学がとるべき行動とはそういうものであるはずだ。わが国の失われた数十年の責任の一端を、人材育成という社会の中の大きな役割を担った大学は背負わなければならない。大学は社会の各パートに人材を配分する単なるパイプラインではないはずだ。

そういう時代に制度化された専門職大学の「専門職」とは何なのか。これまでの時代に言われてきた専門職ではなく、これからの新たなジョブ型社会を支える専門職にならなければならないのかもしれない。大切なのは、ジョブ型社会の「ジョブ」を単なるスキルセットと捉えないことである。専門的な知識と技術を主たる存立基盤とするこれまでのハードな専門職に対して「ソフトな専門職」とでも言えればいいだろうか。このソフトな専門職は、もちろんその固有の知識と技術の体系を持つものだが、それ以上に必要なのが、冒頭に書いた「プロフェッショナルアーツ」である。それを分解すれば「全体観」と

「解像度」だと言える。「全体観」とは、専門職でありながら、その専門の蝸壺の中で最適化しない力と表現できる。そして「解像度」とは、この全体観ゆえに陥りがちな薄っぺらな一般化に抗して到達できる問題をあぶり出す思考の粒度の高さである。これらを専門職大学における「プロフェッショナルアーツ」と呼びたい。この両者を鍛え上げ「 π 型人才」³⁾を育成する仕組みこそが、本学の特徴でもある芸術文化と観光、実習と講義の「ラーニング・ブリッジング」⁴⁾である。問題に対する全体観と高い解像度は、この両者の間の高度に仕組まれた異分野、異なる方法の往還なくしては実現できない。実習がカリキュラム構成上、大きな意味を持つ専門職大学こそは、これからの時代を創る専門職とは何かについてゼロベースで議論し、その教育の実現を通じて、社会変革を先導する責任がある。

冒頭に書いた「リスクリング」の観点は、経済財政諮問会議における「経済財政運営と改革の基本方針2022 骨子案」の重点投資対象としての5つの分野の議論に繋がっていると見るのが適切だろう。即ち、(1)人への投資、(2)科学技術・イノベーションへの投資、(3)スタートアップへの投資、(4)グリーントランスフォーメーション(GX)への投資、(5)デジタルトランスフォーメーション(DX)への投資の5分野である。計画的な重点投資とは別に、社会課題の解決に向けた取組として、多極化・地域活性化の推進をテーマに、観光立国、文化芸術・スポーツ振興が挙げられているのは、本学の在り様とも繋がるものであり議論を注視したい。重要なのは、いずれの分野の取組みにおいても、高等教育がそこでどんな仕組みで、それを促進するのか、またそれを可能にする柔軟な大学設置基準とその運用が

求められることである。

これらの問題提起は、いわば認可の側と申請の側の両者に求められる課題設定だと言うことができる。認可権を持つ側により大きな変革への動きが期待される一方で、申請側も、社会のパラダイム転換を念頭に置いた深い提案が求められる。かつ、両者がこれからの新たな大学づくりを共創的なプロセスに変えることができれば、専門職大学の在り方は一歩ずつ、しかし確実に変わっていくことになるだろう。

注

- 1) ブルーオーシャン戦略とは、競争の激しい市場の「レッドオーシャン」に対して、競争のない全く新たな市場の創造を言う。W・チャン・キムとレネ・モボルニユが『ブルーオーシャン戦略』で提唱した。
- 2) Martin Trow アメリカの社会学者。『高学歴社会の大学——エリートからマスへ』で高等教育の在学率によって、15%までをエリート段階、50%までをマス段階、50%超をユニバーサル段階と呼び、それぞれの段階で教育の目的や内容、方法が異なることを言った。
- 3) 二つの専門と方法を持ち合わせた上で幅広い知見を持つ人材を、幅広い知識を基盤として、一つの専門性を有する「T型人才」と異なるものとしてこのように呼びたい。
- 4) 河合亨と溝上慎一は、2012年の論文「学習を架橋するラーニング・ブリッジングについての分析」で、ラーニング・ブリッジング(以下、LB)が3つの形態を含むものであることを明らかにしつつ、このLBが、深い学習アプローチ並びに将来と日常を関連付ける接続意識、行動と正の相関があることを学生調査によって明らかにしている。

参考 専門職大学の制度化プロセスと本学設置認可申請のスケジュール

【専門職大学制度の検討と第1期の設置認可申請の締切まで】※文部科学省資料より		
2006年	12月	教育基本法改正 教育の目標に職業、生活との関連を重視し、勤労を重んじる態度の養成が謳われる
2011年	1月	中央教育審議会答申 職業実践的な教育に特化した新たな枠組みの構想を提言
2014年	7月	教育再生実行会議第5次提言 実践的な職業教育を行う新たな高等教育機関の制度化を提言
2015年	3月	教育再生実行会議第6次提言 新たな高等教育機関の制度化の推進を提言
		実践的な職業教育を行う新たな高等教育機関の制度化に関する有識者会の審議まとめ 新たな高等教育機関の制度化の基本的方向性について提言
2016年	5月	中央教育審議会答申 新たな高等教育機関の具体的な制度設計について提言
2017年	1月	第193回国会安倍内閣総理大臣施政方針演説 専門職大学を創設し、これまでの単線的、画一的な教育制度の変革を明言
	3月	学校教育法の一部を改正する法律案の閣議決定
	5月	学校教育法の一部を改正する法律公布、2019年4月施行
	9月	専門職大学、専門職短期大学設置基準等公布
	11月末	2019年4月開学設置認可申請の締切

【本学設置認可申請から開学まで】		
2016年	8月	但馬地域3市2町による「但馬地域における専門職大学の設置に関する要望書」の県知事宛提出
2017年	8月	第1回専門職大学構想検討会
	12月	第2回専門職大学構想検討会
2018年	1月	豊岡市環境経済部参事並びに兵庫県企画県民部地域創生局部参事着任
	3月	第3回専門職大学構想検討会
	4月	兵庫県庁に専門職大学準備室設置、企画県民部参事として但馬専門職大学担当
	5月	第1回専門職大学設置準備委員会
	7月	第2回専門職大学設置準備委員会
	8月	第3回専門職大学設置準備委員会
	8月～9月	基本構想案にかかるパブリックコメント実施
	11月	第4回専門職大学設置準備委員会
	2019年	3月
2019年	7月	第6回専門職大学設置準備委員会
	9月	第7回専門職大学設置準備委員会
	10月	芸術文化観光専門職大学設置認可申請
2020年	1月	文部科学省設置室審査意見伝達
	3月	補正申請
	7月	文部科学省設置室審査意見伝達
	8月	実地審査、再補正申請
	10月	芸術文化観光専門職大学設置認可
2021年	4月	芸術文化観光専門職大学開学